

SYLLABUS

(講義案内)

2012 年度 慶應義塾大学経済学部

現代社会史 a, b

澤瀉久敬『医学概論』へのオマージュ

春学期集中 (1 限・2 限連続) 水曜日 9:00-10:30
10:45-12:15

三田キャンパス・西校舎 517 番教室

教授 高草木 光一

<予 定 表>

- ①4月11日 高草木光一「なぜいま『医学概論』なのか——3・11以後の学問・科学・医療」
- ②4月18日 高草木光一「澤瀉久敬『医学概論』の社会思想——その現代的射程」
- ③4月25日 山口研一郎「現代医学・医療の諸問題」
- ④5月9日 佐藤純一「近代医学・近代医療の特質」
- ⑤5月16日 佐藤純一「『医学概論』と医学教育——中川米造を中心に」
- ⑥5月23日 打出喜義「医療事故をどう捉えるか」
- ⑦5月30日 打出喜義「医療者のプロフェッショナリズムについて」
- ⑧6月6日 山口研一郎「地域医療について考える——早川一光と堀川病院」
- ⑨6月13日 長谷川宏「医学の哲学——哲学から医学を考える」
- ⑩6月20日 長谷川宏「新しい『医学概論』の可能性」
- ⑪6月27日 最首悟「医学・生物学・『いのち』学」
- ⑫7月4日 最首悟「医学は『いのち』を救えるか」
- ⑬7月11日 山口研一郎・佐藤純一・打出喜義・高草木光一（司会）
「<シンポジウム>医学・医療・医師とどう向き合うか」
- ⑭7月18日 （予備）

<履修上の注意事項>

(1) テキスト・参考文献

テキスト：高草木光一編『一九六〇年代 未来へつづく思想』岩波書店、2011年。

高草木光一編『「いのち」から現代世界を考える』岩波書店、2009年。

参考文献：各講師紹介の「著作」欄を参考のこと。その他は適宜指示する。

(2) 成績評価

春学期末に行なう試験による。試験の範囲は、上記テキストおよび講義のすべて。

質問用紙の提出は、成績評価に関係しない。

開講にあたって

高草木 光一

【改正臓器移植法をめぐって】

2010年7月17日、改正臓器移植法が施行された。「脳死」概念が揺らいでいるにもかかわらずそれを人の死とした「改正法」は、大きな影を日本社会に投げ落としている。国会審議では小児の「長期脳死」（脳死判定後の長期生存）例が隠蔽され、事実認識が共有されないままに、「15歳以上」という臓器提供の年齢制限が撤廃された。また、ドナーの「自己決定権」によって辛うじて支えられていた「善意の贈物」という物語から、事実上「本人の意志」が除去され、家族の合意のみで臓器提供が可能となった。改正法の成立、施行によって、われわれの誰もが生きてまま臓器を抜き取られるリスクを背負うことになったのである。ここに、「善意」の医師による合法的殺人が承認されたと言っても過言ではない。

改正法が成立する背景には、国内で臓器移植が進まないという状況があり、海外で高額の手術を受けざるをえない子どもの例がマスコミを通して喧伝された。改正を押し進める側にも、一定の論理がなかったわけではない。しかし、この世論を二分したとも言える改正法案審議の過程で、臓器移植はどのように歴史的に位置づけられ、どのような未来が展望できるのかという論議は、ほとんど深まらなかった。

ここに「心臓移植をめぐる二、三の問題」というタイトルの短い論考がある。筆者は、臓器移植という技術が本来科学が進むべき本道ではないことを指摘した後、ドナーの「死」の判定がその本質的な問題であると語る。生きている心臓をドナーから取り出すために脳死を人の死とするのならば、脳死とは何かを解剖学的、生理学的にまづ明確にする必要がある。「自発的呼吸の不可能性」「脳波の不可逆的停止」等の複数の事象を総合的に判断したとしても、そうした事象は死という本質の現象であるに過ぎない。死の研究を行わずして、「[移植]手術に都合のよい死の定義を行ったり、手術実施に好都合な法律をあわただしく制定するなどということ」は断じて避けなければならない。「蘇生学の立場から言っても、心臓の摘出は絶対に軽率にされてはならない」。そして、医学の行き過ぎた技術化を憂い、「技術のために医学があるのではない」。

く、医学のために技術があるのである。そして医学は生命のためにあるのであって医学のために生命があるのではない。生命の尊厳さを忘れた医学をわれわれは真の医学と認めることはできない」と警告を発している。

現在でもそのまま十分に通用するとも思われる、この明快な論旨の論考は、実は1968年9月に執筆され、『看護学雑誌』1968年11月号に掲載されたものである。南アフリカ共和国で世界初の心臓移植手術が行なわれたのは1967年のことだった。その後、世界で一斉に心臓移植手術が実施され、日本でも、1968年8月8日、札幌医科大学病院で和田寿郎（1922-2011）教授の執刀により初の心臓移植手術が行なわれた。レシピエントの18歳の少年は、一時予後良好と伝えられたが、術後83日目の10月29日に死亡した。その後、溺死のドナーに適切な救命措置が施されたのか、レシピエントの病状は心臓移植を必要とするものだったのか、重大な疑惑が浮上した。殺人罪等で告発された和田は、結局不起訴処分となるが、世論の集中的な非難を浴びることになる。

当時の新聞記事を追ってみると、レシピエント死亡以後は、和田移植手術の問題点が次々に暴露され、心臓移植そのものも批判的に捉えられていくことになるが、手術直後は、その成功を讃え、レシピエントの無事を祈る祝賀ムードがマスコミ報道の基調になっていた。しかしそうしたムードのなかで、この論考の筆者も含めて、和田移植手術という個別の問題にとらわれない、本質的な議論も行なわれ、1980年代以降の「脳死論議」を先取りするような問題意識も表明されていた。

【澤瀉久敬と『医学概論』】

この論考の筆者は、澤瀉久敬（おもだか・ひさゆき、1904-1995）、肩書は「大阪大学名誉教授」となっている。いまでは、ほとんど忘れ去られた人物だが、京都帝国大学文学部で九鬼周造（1888-1941）らに師事して哲学を学び、デカルト（René Descartes, 1596-1650）、メヌ・ド・ビラン（Maine de Biran, 1766-1824）、ベルクソン（Henri-Louis Bergson, 1859-1941）等に関する著作がある。晩年には日本学士院会員にも選ばれている。

しかし、澤瀉がまっすぐにフランス哲学研究に邁進したわけではない。1937年に約2年間のフランス留学から帰国すると、思わぬ方向に事態は動いていく。1941年4月

から、大阪帝国大学医学部で日本初の「医学概論」講義を担当することになったのである。フランス哲学研究者であった澤瀉に本格的な医学の知識があろうはずもないが、留学仲間だった大阪帝国大学医学部教授、久保秀雄（1902-1985）に懇願され、医学部には「医学概論」がなければならぬというその信念に押し切られるかたちで「医学概論」講義を手さぐりで始めることになった。

澤瀉「医学概論」の全容は、全三巻の『医学概論』（創元社、1945-1959、誠信書房、2000-2007）に見ることができる。第一巻が「科学について」、第二巻が「生命について」、第三巻が「医学について」という壮大な構想で、独自の議論が展開されている。昨今『医学概論』の名で出まわっている、医学全般の歴史や現状に関するハンドブック的なものとはまったく無縁である。澤瀉は、恩師の一人、田辺元（1885-1962）の『科学概論』（岩波書店、1922年）が「科学の哲学」を内容としていることに準えて、自身の『医学概論』を「医学の哲学」と説明している。

澤瀉は、「医学概論を欠いては医学は完全ではあり得ない」〔澤瀉久敬『医学の哲学』誠信書房、1964年、増補版、1981年、24頁〕と述べ、それが医学全体を反省的に捉え返す試みであることを強調した。とりわけ医学の専門分化が顕著な状況においては、哲学的求心的な「総合」が学問的に要求される。言わば医学の基底的部分を担う固有の領域としての「医学概論」が構想されていた。

第一部として「科学論」が必要とされるのは、一つの科学である医学の理解のためには、科学の価値と限界を認識することが必要だからである。「科学の批判的認識を欠く場合には、科学万能の思想に陥りやすく、そのときは生そのものも科学だけで完全に究明できるという考えともなりやすい」〔同、22-23頁〕と警鐘を鳴らす。また、「生命」を扱う医学においては、「生命」とは何かが問われなければならないが、それを担うのは、生理学や生物学や心理学といった特殊科学ではなく、またその寄せ集めでもない。「諸科学の解明する生命の諸事実、諸現象を認めたいうえで、さらに生命の哲学が必要」〔同、19頁〕とされる。その「科学論」「生命論」の上に、分散する医学の再総合のための「医学論」が置かれることになる。医学の全体的把握がその眼目であり、医学と医療の関係、病気や健康の定義、さらには医療施設や制度の問題にまで視野は広がっていく。しかし、「西洋医学だけを唯一の可能な医学としてそれにのみ絶対的信

頼をおいてはならない」〔澤瀉久敬『医学概論 第一部・科学について』誠信書房、新装版、2000年、12頁〕という言葉に端的に表われているように、澤瀉は、現下の医学を前提にして、その哲学的な跡づけをしようとしたのではない。今後の「ありうべき医学」を構想しながら、医学の哲学を語ったのである。

だから、「医学概論」は、医学部生や医師のためだけにあるものではない。医学と無縁な者はいない。われわれの生活、福祉にとって医学・医療が不可欠のものである以上、それは「正に国民全体の福祉に直結する最も生々しい課題」〔『医学の哲学』、30頁〕として意識されていた。

その後、「医学概論」講義は各大学医学部に設置されるようになったものの、澤瀉の発想が医学界に受け入れられたとは言い難く、現在ではその影響力はほぼ消失してしまっている。澤瀉が医師でなかったことが、等閑視の一因になっていると思われるが、医師でない者が医学や医療について語る必要性、重要性は、今日ますます大きくなっていると思われる。

【水俣病事件と福島原発事故】

すぐに想起されるのは、水俣病事件のことである。水俣病の発生から50年以上が経過し、いま日本政府はその幕引きに躍起になっているが、2005年、熊本学園大学に水俣学研究センターが設立されたことの意味は、改めて問われてもよい。水俣病患者一人一人に約50年間日常的に接しつづけてきた原田正純医師(1935-)が中心になって、専門家と非専門家の区別、文系と理系の区別等を取り払って「水俣学」という新しい学問を立ち上げたことは、「医学や医師に頼っていたのでは埒が明かない」ことの証左と言えるだろう。原田氏自身が、法学者やジャーナリスト等多彩な人々が結集した「水俣病研究会」や経済学者の都留重人(1912-2006)や宇沢弘文(1928-)等をメンバーとする「公害研究委員会」への参加によって、水俣病に対する展望が開けていったことを明かしている〔原田正純「水俣と三池」、高草木光一編『一九六〇年代 未来へつづく思想』岩波書店、2011年、参照〕。

いま、その水俣病とは比較にならないほどの広範囲において、「いのち」の危機が襲っている。言うまでもなく、3・11の東日本大震災による福島原発事故がもたらした放射線被害である。水俣病事件において「御用学者」たちが水俣病像の解明を阻止すべ

く暗躍したことはよく知られているが、そうした露骨な「御用学者」たちが 21 世紀の今日においてなお跋扈していることを、3・11 以後すべての国民が否応なく知らされることになった。「放射線の影響は、ニコニコ笑っている人には来ない」とのたまう放射線研究の権威などの連日の行状を、多くの人が反吐の出る思いで見聞きしていたことだろう。何のために、誰のために学問があるのかという根源的で痛切な問いが、大学や研究者一人一人にいま突き刺さっている。

水俣病事件の解明に尽力した宇井純（1932-2006）は、「公害には第三者はない」〔宇井純『公害の政治学——水俣病を追って』三省堂新書、1968 年、209 頁〕という激的な言辞を述べ、中立公正な第三者を装う研究者は実態として「加害者」の役割を果たしていると断罪した。その発想は、いまなお新鮮であり、公害事件の考察の基点になるものであると考える。しかし、今回の福島原発事故がこの論理では片づけられない複雑な様相を呈していることもまた事実だろう。

福島の放射線汚染地域で牧畜・稲作を行なう農家を「サリンをつくったオウム信者」に準えて物議を醸した国立大学教授がいる。彼は自分の学問的信念に基づいて、確信的に警告的発言していると思われる。その発言スタイルはともかく、その警告の内容を言下に否定することはできない。3・11 以来、政府の見解もマスコミの情報も信用できない状況のなかで、汚染地域では「いのち」と「くらし」が分断されてしまっているのである。

「いのち」と「くらし」は英語では同じ<life>で表わされ、「いのち」の再生産として、つまり活力を日々回復させ、次世代を産み、育てる場として「くらし」があった。その本来切り離せないはずの「いのち」と「くらし」が、いま乖離しあるいは敵対している。「いのち」を守ろうとすれば、上の国立大学教授が指摘するように、放射線汚染地域からできるだけ遠くへ移住することが望ましいに違いない。低線量被曝の危険性は、1986 年にライト・ライブリフッド賞を受賞したアリス・ステュワート (Alice Mary Stewart, 1906-2002) らによって夙に指摘されている。しかし、土地と分かちがたく生業が結びついている農家の人びとは、土地を離れば「くらし」が成り立たない。先祖伝来の地を守り、そこでできるかぎり安全性を確認しながら農業をつづけたいという人びとをわれわれは非難することができるだろうか。「安全」の基準が曖昧で

ある以上、そうした行為が結果的に消費者に対して加害的なものになりうるとしても、である。長期的な放射線被害の予測が成り立たない状況のなかで、「被害者」の立場それ自体が対立的なものへ分裂し、主観的な「善意」に基づく言動が現実にはどのような効果をもつことになるのかも不透明なままなのである。

こうしたなかで、われわれの個々の「いのち」と「くらし」を守り、さらに、「私」を越えた大きな「いのち」へとつなぐにはどうしたらよいか。人類が滅亡に向かって突き進んでいるかのように見える今日だからこそ、「いのち」や「くらし」について専門家の知識や見解を鵜呑みにすることなく「自分」の問題として「自分」で考え抜くことが、われわれには要求されている。澤瀉が「業界人」でなかったからこそもちえた全体性への希求、気概は、いまわれわれがなすべき知的営為への一つの道標になると考える。

【本講義の趣旨と五人の外部講師】

かくして、本年度の講義は、澤瀉久敬『医学概論』を検証・顕彰しつつ、その骨格の上に新たな『医学概論』を構築することを目的としている。2008年度、2010年度と隔年に開催してきた「現代社会史」は、「くらし」のなかから等身大の、しかしトータルな「いのち」の思想を紡ぎだすことを目的としていた。その講義録が、本年度のテキストにも指定している『「いのち」から現代世界を考える』であり、『一九六〇年代 未来へつづく思想』である。2012年度は、澤瀉『医学概論』という切り口を得て、医学・医療の観点からわれわれの「いのち」の思想を集大成したいと考えている。

2012年度慶應義塾大学経済学部版「医学概論」講義には、まず3人の医師を招いた。

大学医学部で「医学概論」担当の経験をもち、したがって自前の「医学概論」を語ることができ、なおかつ澤瀉久敬以降の「医学概論」の趨勢を広く展望できうる人物がこの企画には不可欠である。その最適の人物が近いところにいた。2009年11月、日本生命倫理学会の大会企画シンポジウム「日本におけるバイオエシカルな思想——『バイオエシックス』前史から未来へ」で、私の隣に座っていたパネリストが佐藤純一氏だった〔安藤泰至編『「いのちの思想」を掘り起こす——生命倫理の再生にむけて』岩波書店、2011年、参照〕。佐藤氏は、このシンポジウムでも澤瀉の後継者である中川米造（1926-1997）の思想について報告しているが、中川に師事するために東北大学

医学部から大阪大学大学院医学研究科に進学したという方である。その後は中川の精神を受け継ぎながらも独自の「医学概論」を展開し、ナイジェリアで呪医とともに活動するなど、さまざまなかたちで近代医学のあり方を批判的に検証している。佐藤氏が、本講義の原理的な部分を担ってくれるだろう。

山口研一郎氏は、かつて脳神経外科医として最先端で活躍していたが、1992年に「現代医療を考える会」を立ち上げて以降、脳死・臓器移植、生殖医療、遺伝子診断・治療等々、先端医療の諸問題を検証する活動を継続的に行なっている。現在の医学・医療が戦中の731部隊の影を引きずっていることを強く意識し、医学のあり方そのものを自身の医療活動をとおして問いつづけている数少ない医師の一人である。山口氏には、現場の医師の立場から、戦後の国民皆保険制がどのようにして崩壊に向かっているのか、そこに具体的にどのような問題があるのかを中心にして、現代医学・医療について考察していただくようお願いした。また、「わらじ医者」の異名をもち、ユニークな住民主体の地域医療を京都で実践してきた早川一光氏（1923-）の思想と行動に、山口氏自身の思想と行動を重ね合わせて、医学・医療の今後の可能性についても語っていただくことにした。

もう一人、現在の医学・医療が抱える陰の部分ストレートに語ることでできる医師として打出喜義氏をお招きした。1998年金沢大学附属病院で起こった「無断臨床試験」事件で、患者の側に立って裁判を闘い、産婦人科主任教授を公文書偽造で告発したのが、同専任講師の打出氏である。その後も医療過誤等の問題で患者サイドに立って積極的に社会的発言を行なっている。ある意味で衝撃的なのは、告発された教授が十数年経ったいまでもそのまま打出氏の「上司」でありつづけているという事実である。反逆した「部下」が大学病院内で決して優遇されていないだろうことは容易に想像できるが、この人は淡々とマイペースを貫いている。「医療過誤」を切り口にして、大学病院の研究・診療活動の実態、製薬会社との関係等、華やかに報道される先端医療の裏側にある諸問題を根こそぎ明らかにしてくれる人物は打出氏をおいて他にいないと考えた。

新しい「医学概論」構築のためには、医師だけでは足りない。『医学概論』を貫くフランス哲学研究者・澤瀉久敬の意図を、大きなヨーロッパ近現代哲学史の流れを背景

にして相対化できるような人物、しかも日常的な「いのち」の心情のなかから「いのち」の問題を浮かび上がらせることのできる人物、と考えたとき、長谷川宏氏以外の名前を思いつかなかった。1968-69年、最首悟氏らとともに東大全共闘の一員として東大闘争をたたかい、その後は学習塾を拠点に、ヘーゲル (G.W.F. Hegel, 1770-1831) を中心とする哲学研究をつづけてきた。著作、翻訳は膨大な数に上り、その独自の練達の翻訳には、第一回ドイツ連邦政府翻訳賞が与えられている。ヘーゲル、マルクス (Karl Marx, 1818-1883)、ハーバーマス (Jürgen Habermas, 1929-) 等、長谷川訳のお世話になった人は多いだろう。ベルクソン以降のヨーロッパ現代哲学の動向を見据えて、新しい「医学概論」の哲学的基礎づけを担っていただきたいと願っている。

そもそも澤瀉『医学概論』の存在をご教示いただいたのが最首悟氏である。最首氏のベースにあるのは生物学だが、生物学では「いのち」を捉えられないとして、独自の「いのち学」を志向している。澤瀉『医学概論』第二部「生命について」は、既存の生物学を超えたところで発想したものであり、最首氏の構想と重なる部分をもっていると思われる。澤瀉のこの第二部は、その博識を練り込むようにして仕上げたオリジナリティに富むものであるだけに、難解、晦渋な部分を多く含んでいる。最首氏によって、その部分の現代的意味が明らかにされることを期待している。また、澤瀉『医学概論』解釈と3・11後の状況認識の上に、「いのち学」の新たな展望が語られることになれば、それは知的刺激に満ちたものになるだろう。最後に、本講義の締めくくりの意味を込めて、「医学は『いのち』を救えるか」という問いを立ててもらうことにした。

こうして、澤瀉『医学概論』の「科学について」「生命について」「医学について」の三部作に緩やかに対応するように哲学者、「いのち学」者、三人の医師を迎えることができた。澤瀉を下敷きにした新たな「医学概論」は、最強とも思える布陣を整えた。

学生諸君にはどうか積極的に参加してもらいたい。「いのち」や医学・医療に無縁でいる人はいないし、誰もが「いのち」や医学・医療に真摯な思いをもっている。そうした思いがぶつかり合うところに、われわれの思想としての「医学概論」が立ち上がる。新しい思想が教室から立ち上がる瞬間を共有したいと切に願っている。

<講師紹介>

山口 研一郎（やまぐち・けんいちろう） 医師

〔略歴〕

1949年長崎県生まれ。長崎大学医学部卒業。現代医療を考える会（会員数200名）代表として、先端医療がはらむ諸問題について検証するとともに、やまぐちクリニック（高槻市）で、脳卒中や頭部外傷後の精神的身体的ケア、リハビリに従事する。

〔著作〕

『生命（いのち）——人体リサイクル時代を迎えて』（編著）緑風出版、2010年。
『脳受難の時代——現代医学・技術により蹂躪される私たちの脳』御茶の水書房、2004年。
『操られる生と死——生命の誕生から終焉まで』（編著）小学館、1998年。
『有紀ちゃんありがとう——「脳死」を看続けた母と医師の記録』（共編著）社会評論社、1992年、増補改訂版、1997年。

佐藤 純一（さとう・じゅんいち） 医師

〔略歴〕

1948年福島県生まれ。東北大学医学部卒業。大阪大学大学院医学研究科博士課程単位取得退学。宮城大学看護学部教授、高知大学医学部教授等を歴任。医学概論、医療思想史、医療社会学専攻。

〔著作〕

『先端医療の社会学』（共編著）世界思想社、2010年。
『100問100答医療のふしぎ』（編著）河出書房新社、2001年。
『文化現象としての癒し——民間医療の現在』（編著）メディカ出版、2000年。
『医療神話の社会学』（共著）世界思想社、1998年。

打出 喜義（うちで・きよし） 医師

〔略歴〕

1953年石川県生まれ。金沢大学医学部卒業。医学博士。金沢大学附属病院専任講師。生殖内分泌学、周産期医学専攻。金沢大学附属病院で患者に無断で行なわれていた臨床試験に抗議し、患者側に立って裁判をたたかう。以後、医療過誤問題等で活動している。

〔著作〕

『「人体実験」と法——金沢大学附属病院無断臨床試験訴訟をめぐって』（共著）御茶の水書房、2006年。

『「人体実験」と患者の人格権——金沢大学附属病院無断臨床試験訴訟をめぐって』（共著）御茶の水書房、2003年。

「医療を”内部”から崩壊させるな——医者から医者へのメッセージ」（対談）『論座』朝日新聞社、2007年12月号。

「日常診療と臨床研究との狭間で——同意なき臨床試験裁判から」『臨床倫理学』プロジェクト研究〈医療システムと倫理〉4号、2006年。

長谷川 宏（はせがわ・ひろし） 哲学者

〔略歴〕

1940年島根県生まれ。東京大学文学部卒業。東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。東大闘争をたたかった後、哲学アカデミズムから身を退き、所沢に「赤門塾」を開設。以後、市井にあって塾経営と哲学研究をつづける。

〔著作〕

『初期マルクスを読む』岩波書店、2011年。

『同時代人サルトル』河出書房新社、1994年、講談社学術文庫、2001年。

『ヘーゲルの歴史意識』紀伊國屋新書、1974年、講談社学術文庫、1998年。

ヘーゲル『精神現象学』（翻訳）作品社、1998年。〔第1回ドイツ連邦政府翻訳賞〕

最首 悟（さいしゅ・さとる） 環境哲学者

〔略歴〕

1936年福島県生まれ。東京大学大学院理学系研究科動物学専攻博士課程中退。77年から水俣にかかわる。76年に生まれた三女星子を中心に、学問、水俣を考えつづける。無用の用、無思想の思想、無派の派のなかに「いのち」を浮かび上がらせようとしている。

〔著作〕

『「瘡」(ひ) という病いからの——水俣誌々パート2』どうぶつ社、2010年。

『水俣五〇年——ひろがる「水俣」の思い』（共編著）作品社、2007年。

『星子が居る』世織書房、1998年。

『生あるものは皆この海に染まり』新曜社、1984年。

高草木 光一（たかくさぎ・こういち） 慶應義塾大学経済学部教授

〔略歴〕

1956年群馬県生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。慶應義塾大学経済学部助手、助教授を経て、2001年より現職。社会思想史専攻。

〔著作〕

『一九六〇年代 未来へつづく思想』（編著）岩波書店、2011年。

『「いのち」から現代世界を考える』（編著）岩波書店、2009年。

Marx for the 21st Century, Routledge, 2006. （共著）

『社会主義と経済学』（共著）日本経済評論社、2005年。